

「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い ～青い森のほほえみプロデュース活動奮闘記～



山本菜穂子

<知事へのプレゼンテーション>

とうとう次は私たちの番だ。

大きな円卓に並ぶ知事、副知事、各部の部長。企画政策部の面々。

案内され、プレゼンターの位置へ。
(足がもつれそう)

パワーポイント準備完了。

「それでは、次のプレゼンに入ります。どうぞ。」

♪チン♪ プレゼンスタートのベル。

クルッと背を向ける。沈黙一呼吸。振り向きざま大きな声で

「何度言ったらわかるの！もう帰ってこなくていい！！」

私の怒声が会場に響き渡った。部長たちがビクッと背筋を伸ばし、次の瞬間「あ～びっくりした～」と知事の気さくな笑い声。(よし！成功！)

「そんなお母さんの怒鳴り声が隣の家から聞こえてきました。さあ、皆さんならどうしますか？このお母さんに、なんと声をかけてくださいますか？」

きまった！つかみはOK！

青森県職員庁内ベンチャー制度(以下「ベンチャー」という。)。職員が提案し、直接知事にプレゼンテーションし、知事からOKを得られたら、その職員自らが事業を実施する仕組み。平成18年度、当時県の本庁に籍をおいていた私はひよんな事から、そのベンチャーの仕組みで事業を提案しなければならない状況に追い込まれていました。私自身は、それほど積極的な押しの強い人間ではありません。むしろ、慎重で石橋は叩くうちに渡らずに壊しかねない人間です(と思っています)。ですから、もし、追い込まれていなかったらこんな新規事業を考えることもなかったでしょう。

でも一方で、やるとなったら頑張ってしまう性分でもあって、「どうせ何か提案しなければならないのなら、本当にやりたいと思っていたものをぶつけてみよう。」と考えるに至ったのです。それが「青い森のほほえみプロデュース事業」でした。

<なぜ、書くのだろう・・・>

はじめまして、私は現在青森県中央児童相談所でこども相談課の課長

をしています。夏の短い青森ではクーラーを持たない家庭も多く、暑くて窓を開ける季節になってくると泣き声が聞こえて心配だという虐待通告が増えます。最近では、「児童相談所です」と訪ねて行くと、突然絶望したかのように母親に泣きだされることもあります。いまだき児童相談所はよっぽど怖い機関なのかなとちょっと悲しくなったりもします。さて、今回このマガジンで書かせていただきたいと思ったのは、「青い森のほほえみプロデュース」という取組でのよしなしごとです。地域に、チェックマンを増やすよりは、安心してSOSを聞いてあげられる人を増やしたい、それによって児童虐待の発生を予防できるようなそんな地域づくりはできないか、そんな思いから立ち上げた事業です。

【青い森のほほえみプロデュース】

青森県を「ほほえみ」と「笑い」で満たし、子育て中の保護者に精神的ゆとりを生み出すことにより、子どもを産み育てやすい青森県を創り上げたい。

この事業は、虐待通告への対症療法に追われることで疲弊していた児童相談所での勤務経験から、虐待の「発生予防」のために役立つことをしておきたいという発想から始まりました。

虐待問題の背景には「孤立」と「精神的なゆとりのなさ」が必ず見られるとの指摘がなされています。では、「孤立させない」「精神的ゆとりを生

み出せる」そんな環境を整えるために何かできることはないのだろうか。

平成18年度、全国ではじめての「ほほえみの地域づくり」を提案し、県の事業として認められ開始したのが平成19年度でした。東京医療保健大学の高柳和江教授に支持し、先生がつくってくださった「ほほえみの7か条」(自らがほほえみ、周囲にほほえみを生み出すための7つのポイント)を県民に伝えながら、学んでくれた県民には一緒にほほえみあふれる地域を創ることに協力してもらおう。そんな仕組みで先生と県民と一緒に進めてきた取組です。

「寄り添ってほほえむことから始めよう」そんなキャッチフレーズで講習会の受講を勧奨し、事業開始から5年目の今9月で、「ほほえみの7か条」を学んでくれた「ほほえみプロデューサー」が5歳児から90代までのべ30,000人を超えました。青森県民約138万人の46人に一人は、自らほほえみを広める人＝“ほほえみプロデューサー”になったのです。

「青森県が児童虐待関連事業として実施した『青い森のほほえみプロデュース事業』は、ポピュレーションアプローチとして第一級のものだったと評価している。なにしろ、他人の悪口を言い、他人のあらをさがし、否定的な視点でしか物事を見れない青森気質に敢然と立ち向かったのだから！」

現在、青森県むつ児童相談所の所

長であり、青森県臨床心理士会の会長でもある関谷道夫氏が昨年度、ありがたいことにこの取組をこのように評してくれました。(青森気質が本当にこのようなものかどうかについては、青森を愛する青森県人としての彼自身の自嘲的匂いが半分かな。よしんばそんな傾向があったとしてもそれって青森県人に限ったことでもない気がしますしね。ちなみに私自身は結婚して青森県人となった元都民、現在は南津軽郡田舎館村(いなかだてむら)の村人(むらびと)です。)

そんな取組について今回、団士郎さんをお願いし、書かせていただくことにしました。私の中では団さんからの影響は少なからず。この取組が芽を出すための土壌には、団さんからもらった肥料がたくさんたくさん混ぜ込まれていたのですが、あのときのあのことばがこんなものを生み出したんだと話しても団さんは「そんなこと言ったか？」といつもそうおっしゃいますが・・・

私がこの取組の種を手にしたのは平成9年度。種を蒔いたのは平成18年度。「願い続けていたら必ずかなう」って言ったのは団さんでした。(よね。ですよ。)だから、忘れずに願い続けていました。そうしたら種を蒔く時期が訪れました。

事業開始以降無我夢中で走り抜けてきたこの5年あまり。何の必然で？何の幸運で？この事業が形にな

り、発展したのか、実は私自身にもわからないことが多いのですが。難しいことは書けないけれど、「初めて」のことを作り上げながら(初めてって、想像以上にたいへんでした。)大切にしてきたこと、捨ててきたこと、守ってきたこと、守られてきたこと、感じたこと、考えたことを、残したい、伝えたい。そして、もし、何かしら参考にしてもらって、誰かが次に進む勇気の素になったら嬉しいなとそんな気持ちです。

本当は当たり前なことだけれど、10年後は今この瞬間に始まっているってそれが私の実感です。

これを読んでいる皆さんも、大事だと思ふことは忘れずに実現を願い続けましょうよ。きっとかなうから。これを実感と共に伝えられる様になったこの5年間です。

さてまずは、この事業の氏素性についてお伝えするところから始めたいと思います。

事業の種を手に入れた平成9年度のお話からです。

<ほほえみ事始め 黎明期>

平成18年度に事業を組み始めたとき、周囲から「青森県でお笑い芸人でもつくるのか？(宮崎県ならいざ知らず・・・)」そんな声を何度聞いたことか。でも、これは、いたってまじめな挑戦でした。

平成9年度、児童相談所に勤務していた時、所内の自主研究活動として管内の保護者約1,000名を対

象に虐待に関する意識調査を行ったことがあります。

その時、調査の主要部分とは別に、こんなことを自由に記述してもらいました。「虐待をした保護者をどうしたらいいと思いますか？」「子育て中の保護者が虐待に至らないために必要なものは何だと思いますか？」

一番多かった回答は、「虐待をした親は罰すればいい」というものでしたが、約1割が「親だってたいへんなのにわかってもらえない。」「責められるような気がして相談に行きにくい。」「援助を求めると、自分が求めている以上の要求をされる気がして嫌だ。」「あたたかい地域が欲しいのに。」というものでした。当時「まるで『北風と太陽』だな」と思っていました。相談に来て欲しかったら、相談しやすい環境をつくること。それがとても大事だと思えました。

そこから約10年、青森県における児童虐待防止対策は、早期発見、早期対応から始まり、平成17年度からは家族再統合の取組に力を入れるという経過をたどって着実に進めてきています。

でも一方で、個人的には先ほど説明したアンケート調査の結果がずっと気になっていたのです。保護者が望んでいた「責めないで、辛さをわかってくれる、あたたかい地域」。そこには何も手が着いていない。そんな地域づくりができれば、きっと、虐待の発生を未然に防止するための大きな力になるはずだと思えるのに。でも、どうやって・・・

その想いを平成18年度までどこかで引きずったままの私がありました。

<実は大きかった個人的因子

ほほえみとの出会い前夜>

私、神様（人の意志を超えた思惑？）っているって思うんです。ほほえみの事業を形にする前に、生半可でなく本気で取り組みたいと思えるように、神様はいろいろな試練を用意して、後々の決意を強めようとしていたんじゃないかと今になれば思うのです。

平成15年度に私は定例人事異動で児童相談所から引き離され、41歳にして（お～～堂々と年齢を書いてしまった）初めて県の本庁に勤務することになりました。

それも、児童福祉とは直接関係のない部署。「健康福祉政策課企画政策グループ」という健康福祉部主管課の中の企画部門。その時、本庁に勤務することなどまったく想定していなかった私は、その名前を聞いただけで萎縮！だって、これまでの対人援助職としての経験が活かせるとは到底思えず、予算？議会？何もわからず。そして行ってみたら本当に「ことば」が通じないのですから。それまでの児童相談所勤務で少しはあったはずの自信もすぐにどこかに行ってしまう、「誰の役にも立てない自分」という新たな自己イメージがだんだん強くなり。夏くらいには、いなくなってしまうたら楽だな～などということも頭をよぎったり。上司

は私に「あなたは自分のことを駄目だと思っているかもしれない。確かに周りには本庁慣れしていて、予算も議会对応もなんでもこなせる職員がいるだろう。でもあなたには、彼らにない出先機関での経験がある。出先を知っていてそれに基づいて本当に県民にとって必要なものを形にできるのはむしろ彼らでなく『あなた』なんだよ。」とそうことばを掛けてくれました。(素敵な上司でしょう。こうなりたい。)

そう、一人一人に価値があるって、これまで私だって多くの子ども達にそのように伝えてきたはず。でも、いざ自分がそれを見失う立場になると、そこから立ち直るのはとてもたいへんで。それから私は、一生懸命愚痴を言うようにしました。これ以上自分がまいってしまわないように。そしてできる限り笑顔をつくる様にしました。形から気持ちが変わる(これもかつて団さんから聞いたけど。)ことを信じて。そしてもう一つ、この経験は覚えておこうと思いました。「人は誰の役にも立てないと感じたとき、ひどく力を落とすものであること。逆に誰かの役に立てると感じられたらそれが生きるための大きな力になるはずだということ。」このことを覚えておいたら、きっとこの状態から立ち直ったとき、何かの役に立てられるはずだと。私自身が、形だけでなく心から笑えるようになったなと感じたのはその年度の2月でした。

もう一つ、平成15年度に神様がくれた試練は、夫の病気でした。血液のがん。「もしこのまま薬が効かなければ余命1か月です」と宣告されたのは秋でした。その時、夫の友人が熱心に話してくれたのは、笑うことで免疫力が高まるということでした。もともと素直な！私は、とにかく笑っていようと決めました。そして、夫と一緒に落語のDVDを見て、子ども達の日々の様子を楽しく語り。泣くのは病院から家までの車の中だけと。詳しくは書きませんが、なかなか効果が見えなかった薬が効き始め、結果、夫は今も生きています。(最近はお酒の飲み過ぎが気になるくらい。)笑ったことにどのくらい効果があったのか、それは確かめようもありません。でも、それは「ほほえみ」を組み立て始める3年も前に、確かに私が経験したことでした。

平成15, 16, 17と3年間、とにかくにも、企画政策グループで「企画」して「予算」を組んで、「財政課」に説明して認めてもらって、「議会」に向けて事業説明を行うなどという経験を積むことになりました。それは「ほほえみ」を創るにあたり、基礎となる知識経験となっていました。

そして平成18年度。私の計画では、本庁でのつらい3年間の苦役を終えて、児童相談所に戻っているはずでしたのに、本庁にいたまま隣の部屋の「こどもみらい課」へと転勤になるのです。

そこで、「ほほえみ」を創ることになる最後の試練が待っていました。

その試練は、こどもみらい課に転勤になって早々の4月にやってきました。

＜ベンチャー事業組みへ＞

実は、こどもみらい課で、私は、その時青森県が重点的に進めることにしていた「家族再統合」事業の2年目を担当することになっていました。そして着任早々の私の役目は、事業の1年目に実施した海外先進地視察（青森県も頑張っているでしょ！）の報告を知事に行くことでした。課長と一緒に出向いた知事への報告。その終わりに知事から発せられたのが「児童虐待防止対策をベンチャー事業で組んでみたらいいの」という一言でした。課長は「そうですね。」と軽く（そう聞こえた）答えています。あれ？今、何か言われた？それって誰がやるの？何をするの？まさか・・・

しばらくすると、「菜穂子さん、そろそろ考えないと間に合わなくなるわよ。」ん??

あの時感じた不安は、やっぱり。

そこで、忙しさが更に倍増するという泣くに泣けない腹立たしさの中、私の「どうせやるならいい加減なことはしたくない。意味があったと思えることをしたい。」といういつもの悪い(?)癖が頭をもたげ。あの、ず〜っと引っかかっていたアンケート結果を形にできないかと考え始め

ることになりました。まあ、ここの産みの苦しみの詳細はおいておくとして。

今、おそらくどこの地方自治体も財政的にゆとりのある状態ではないでしょう。その中で新規事業に予算をつけてもらうということは実はとてもたいへんです。その中でベンチャーという仕組みは、意欲のある職員にとっては（私のように追い込まれた者にも、かな）想いを形にできる数少ないチャンスとして意義の大きいものと思います。何せ知事に直接ものを申してお金と人をつけてもらえるかもしれないのですから。

さあ、事業の形を整え、現状、課題、目的、方法、新規性、県がやるべき理由などをペーパーにまとめ、まずは、政策調整課のチェックを受けることになります。前例はある？ないです。効果はなに？あたたかい地域。ターゲットは誰？県民全員。おいおい！そんな事業あり？という中身なのです。行政的には。政策調整課や財政課は当然厳しいのです。この事業に大事な税金を使って県民から納得を得られるのか、という視点ですから。でも決して敵ではないのです。みんな少しでも県を良くしたいと思っている仲間なのです。そのことは過去3年で学んでいました。そして担当してくれた職員は皆一生懸命、こちらの真剣な想いを聞いて理解しようとしてくれました。その時、ベンチャーで提案されていた事業が何本あったのか、詳しくはわかりません。でもまずは、知事へ

のプレゼンテーションの権利を得られる5本に残れるかどうか。それがこの政策調整課へのヒヤリングにかかっていたのです。最後、「想いはわかったけど、結果がイメージできないんだよな～～う～～ん」と。そりゃそうでしょう。だって、初めてやることなんだもん。提案者の私にだって何が起こるかわからない。でも、これが大切だということだけはわかるんだもん！！と、そんな気分で。そこで禁じ手「でも、知事がベンチャーで事業を組むようになって言ったので、せめてそこまでいけたらな」とボソッとつぶやき。・・・ハハハ、そんな言い方は女性の強みかしら。何とか温情で残らせてもらいました。

<知事へのプレゼンテーション>

やっとそこまで行ったのに知事プレゼンを前に私は萎縮していました。知事の前でプレゼンをする。きっと本庁経験の豊富な、行政マンとして優秀な人たちは、統計や様々な分析データを持ってきてきれいにグラフや表を使って整理するのだろうな～。私もまがいなりに本庁に籍をおく人間だ、それをしないと格好悪いのだろうな～～。私にもそんなことを期待されているんだろうな～でも、どうしようかな～、できそうもないしな～

「健康福祉部からベンチャーで事業提案するのは、今回が初めてだ」とかそんな雑音も聞こえてきて、何だかこれを通すことが部の威信に関わるかのような気分になったり。

そんな見栄と迷いで何日も暮らしていました。

あ～～もう間に合わなくなるぞ～～せっぱ詰まってきました。で、ふと思ったのです。

私はこの事業をどうしてもやらなければならないの？いや、できないならできない方が、これ以上忙しくならなくていいじゃない。知事がやってもいいと言えればやればいいし、やらなくてよいと言えればやらなければいい。そう開き直ったら、知事プレゼンの見え方が変わってきました。せつかく知事に直接児童相談所のことを伝えられる機会ができたんだ。私が伝えるべきは「この取組にはきっと意味がある」と、児童相談所を経験した私自身が思っているということ。児童相談所で仕事をしているとこんなことを感じるのですよという、私が知っているけれど知事は知らないことを知事にわかってもらうこと。あれ？これって地域関係者に対して行う研修会と同じ感覚じゃない。そうか、じゃあ、とにかく、私の持ち時間の8分の間、知事に興味を持ってちゃんと話を聞いてもらえる工夫をすればいいんだ。見えた！何をすればいいか、何をしたいか。練習を重ね、時間もピッタリ。そうなってくると、今度は当日が楽しみに。

順番は5本中3番目。別室での待ち時間、一緒にこの事業提案に名を連ねてくれた関さんと掛け合っている。

たことばは、「今日でおしまい。私たちのこのプレゼンの目的は、知事や各部長達に児童相談所をわかってもらうこと。事業自体は突拍子もないことを考えているのだから、駄目で元々。この事業のことを考えられるのも今日が最後。だから、思い切りやってこようね。」ということでした。

最初の仕掛けがうまくいくかどうか、気分はドキドキと、そしてワクワク！でした。

そして、冒頭に書いたようにつかみはOK。つかみがOKなら、たかだか8分。興味を離すはずもなく、と、気持ちはそんな勢いでした。でも、さすがに緊張。

伝えたのは、「虐待」とレッテルを貼ってチェックをすることも必要なときはあるけれど、一方で安心してSOSを出させてあげる地域がほしい。そんな地域の関係を「ほほえみ」を広めることで作っていききたいということ。

終了後、居並ぶ各部長からのコメントは「家族や地域の温かさか。忘れていた大切なことを思い出させてもらったよ。」「県職員にもこんなプレゼンのできる人がいたんだな～」

そして知事からは、「こういう突き抜けたものが欲しかったんだ。」「笑うことでとんでもなく悪いことが起きるということは考えにくいよね。」「現時点では行き着く先が見えなくても、やっていくうちに何かが見えてくる取組のような気がするよ。」と

いうことでした。(緊張していて、しっかりとは覚えていないというのが本当ですが、確かこんなニュアンスのことを言ってくれたのです。)

とても嬉しくなりました。何がかという、「結果、結果」と、近視眼的に結果を求められることが当たり前になっていると感じる昨今、知事は、「過程の中で何かが見えてくる、それが大事だ」と言ってくれたのです。過程に意味がある、それはまさに、現場にいて感じていたことでした。

私は、こんな風にこの提案を応援してくれた知事に、勝手ですが信頼を感じました。そして、この信頼には、何とか報いたいと思ったのでした。ほほえんで温かい地域をつくることによって。単純な人間ですから。さあ、奮闘記の始まりです。

◎青い森のほほえみプロデュース事業概要について、詳しく知りたい方は下記でご覧いただくことができます。

＜青い森のほほえみプロデュース事業—青森県庁HP内—＞

<http://www.pref.aomori.lg.jp/life/family/hohoemiindex.html>

＜青い森のほほえみプロデュース推進協会公式サイト＞

<http://hohoemiaoimori.web.fc2.com/>